理 事 会 便 り

第5回 常任理事会議事録

日 時 昭和35年9月27日（水） 14.00～15.00
場 所 東京管区気象台長室
出席者 正野，桜庭，岸保，有住，松本，磯野，今井，根本，神山，吉武，淵各理事（順序不同）
決 議 1. 日中学術交流派遣団に当学会からは神山，松本両理事を推せんすることになった．
2. 日中学術交流に関する要望書は内容一部検討の上出すことになった．

第6回 常任理事会議事録

日 時 昭和35年10月8日（土） 11.00～14.00
場 所 神田一ツ橋 学士会館
出席者 神山，磯野，吉武，岸保，松本，根本，桜庭，今井，畠山，正野，和達，淵各理事（順序不同）
決 議 1. 大会2日目の午後藤田氏に「最近のメソ気象学」について講演依頼を交渉することとなった．
2. 定款改正については次回に再検討することとなった．

第7回 常任理事会議事録

日 時 昭和35年11月5日（土） 11.00～
場 所 神田一ツ橋 学士会館
出席者 畠山，吉武，松本，桜庭，根本，有住，神山，淵各理事（順序不同）
決 議 1. 日中学術交流の派遣費用の募金には，国際学術交流委員会が当ることとなった．
2. 秋季大会の座長を次のとおりお願いすることとなった．

		第1会場	第2会場
第1日（11月17日）	午前	荒川秀俊	伊東彊自
	午後（前半）	肥沼寛一	大田正次
	午後（後半）	伊藤 博	高橋喜彦
第2日（11月18日）	午前	高橋浩一郎	井上栄一
	午後（特別講演）	荒川秀俊	
第3日（11月19日）	午前	石井千寿	水野長輝

気 象 界 消 息

1. 国際通信課誕生

北半球気象資料の国際交換が重要となり，11月1日づけの政令で，気象庁予報部に国際通信課が設置された．その所掌事務は，ニューデリー回線およびホノルル回線によって行なう北半球気象資料の国際交換の通信，ホノルル回線によって行なう航空気象報の対米通信，ならびに航空気象無線（JMB），および府中回線によって行なう在日米軍に対する通信である．

2. 宗谷丸出発

宗谷丸は，第5次南極観測のため，11月12日に東京港を出帆した．第5次の高層気象観測は，第4次の180回に比べ400回と観測回数をふやし，また新たにオゾン観測も行なう．

気象関係の隊員は，守田康太郎（副隊長），清野善兵衛，鈴木信雄，三技隆次，坂口威（以上越冬組），田島成昌，宮下伊喜彦，榎本文夫（以上宗谷乗組）の諸氏である．

3. 10月10日に東パキスタンを襲った台風

ベンガル湾の奥，ガンジス河の下流域にある東パキスタンに，10月10日サイクロン（インド洋の台風をサイクロンという）がおそい，毎秒35メートルの暴風が吹き，高汐を起して，チッタゴン，バリサル，ノアカリ地方やベンガル湾海岸の6つの島ジャバー，アミン，ハチヤ，バータ，アレクサンダー，ラムガチに大被害を与え，少なくとも3,000人の死者を出した．この地方の家の85%は倒壊し，無数の死体が波にさらわれ，目撃者の言によると，ある小島では200以上もの死者が数えられた．この台風は，南支那海を西進し，弱まりながら，タイを横断したものらしく，ベンガル湾に入ってから発達しながら北西に向いガンジス河河口で，東経90度線に沿って北上，その後北東に向って消滅した模様である．

4. 台風第20号～第25号

台風第20号から第25号までは，すべて本邦には直接の影響を与えなかった．第20号（Hester）は，四国沖まで北西進して来たが，ここで，消滅，第21号（Judy）第24号（Mamie），第25号（Nina）はいずれも本邦の東方洋上を北東に進んだ．また第22号（Kit）第23号（Lola）はいずれも西進してフィリピンを横断し，南支邦海を通り，インドシナに上陸して消滅した．最低気圧は第22号は970mb（10月6日），第23号は975mb（10月12日）を示し，フィリピンには多大の被害を与えた模様である．

5. 川畑氏渡米

本学会会員，気象庁観測部長，川畑幸夫氏は「津波警報業務協定締結に資するための事前業務打合せ」のため10月31日から11月19日まで，ホノルル，ワシントンに出張された．

6. 和達氏，今井氏渡米

本学会理事の気象庁長官　和達清夫氏は科学技術会員の資格で，本学会理事，気象研究所台風研究部長今井一郎氏や建設省の土木研究所長ら2，3名の人と共に，調査団長として，11月16日から11月30日まで，シカゴ，トロント（カナダ），ワシントン，マイアミ，ニューホルリング，ロス・アンゼルス等で各国の防災に関する施設および研究状況を視察された．

1682	山川　弘	〃	B
1683	山本純一	〃	B
1684	清水喜允	〃	B
1685	山本　昇	〃	A
1686	森　秀雄	〃	A
1687	土屋　喬	〃	B
1688	沢本弘志	〃	B
1689	山岸照幸	〃	B
1690	島村泰正	〃	B
1691	藤井和敏	〃	B
1692	島村　克	〃	A
1693	野村正徳	〃	B
1694	古川武彦	〃	A
1695	山中正行	福岡管区㊣	A
1696	土屋正一	米沢気象通	A
1697	根津健二郎	〃	A
1698	吉田　茂	東京理科大学	B
1699	箕輪年雄	横浜気象台	A
1700	杉本文男	〃	A
1701	松永　隆	鹿児島気象台	A
1702	原之園利行	〃	A
1703	少山千万樹	医科歯科大学	A
1704	信藤俊三	片山病院，外科医	A

中国気象学会への公開要望書について

さきに発足した国際学術交流委員会の提唱で，日本気象学会は，日中気象学会の学術交流を促進させるため次のような公開要望書を中国気象学会に送りました．

日気学第556号
昭和35年10月18日

中国気象学会長　殿

日本気象学会理事長
正野重方

日中気象界の学術交流について

日本気象学会は，貴国気象学会との学術交流について，過去も現在も特別に深い関心を持ち続けています。1956年6月より貴国の気象観測結果を入手できるようになり，気象学の研究及び気象業務を遂行する上にはかり知れないものをもたらしてくれましたことは，我々日本の気象研究者及び技術者及び技術者にとって大きな喜びであります．

日本気象界と中国気象界との人的交流は，1954年10月，和達清夫気象庁長官が貴国に招待されたことによって始められました．続いて1957年2月，貴国の徐長望気象局長，趙九章地球物理研究所長の来日は，日中両気象界の交流を深める機運を一層高めてくれました。続けて1957年6月，佐貫亦男，岸保勘三郎，毛利茂男の三氏が再び貴国に招待され，日中気象界のむすびつきは更に深いものとなりました．

その後の日中の気象界の交流については，残念ながら満足すべき状態が続いたとは言えません．しかし，我々日本気象学会員は日中気象界の交流を盛んにすることについてはたえず深い関心を持って来ました．

日本気象学会では，現在のような不自然な日中気象界の現状を打破するために，「国際学術交流委員会」を設け，この委員会を中心にして，種々の運動を進めることになりました．現在，この委員会では，